

|                  |   |
|------------------|---|
| Title            | ゴースに就て  |
| Sub Title        |   |
| Author           | 松本, 信廣(Matsumoto, Nobuhiro)   |
| Publisher        | 三田史学会   |
| Publication year | 1933  |
| Jtitle           | 史学 Vol.11, No.4 (1933. 2) ,p.18(524)- 18(524)   |
| JaLC DOI         |   |
| Abstract         |   |
| Notes            |   |
| Genre            | Journal Article   |
| URL              | <a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19330200-0018">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19330200-0018</a> |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## ゴレスに就て

葡人の記文に見えたゴレスなる名稱に就て最近秋山謙藏氏前島信次氏岡本良知氏などの新研究現はれ、新材料を提供し、かつその比定に就てはなばなしの論戦が行はれたことは悦ぶべき出来事である。前島氏が従來の論者の看却してゐたアラビア人の記文を紹介した功績は、没却すること出来ないが、氏のグウル即ちゴレスなりと云ふ説が、恰も氏の創見である如く述べられてゐるのは遺憾である。此點はフェラン氏の「マラカ、マラヌ及びアラユール」の附録に述べた「グウルの島—琉球—臺灣」(フランス・アジア協會雜誌一九一八年七月・八月一二六—一三三頁及び一五五頁も参照)に詳細に説かれてをり、フェ氏に最初の比定の功を歸さねばならぬ。イブン・マージドやスライマーン・ビン・アマドのグウルに關するアラビア文の佛譯も此篇に採録されてをり、葡人の記文も比較對照されてをる。此處で琉球を北臺灣とするフェ氏の説は、贊成出来ないがこゝいふ地名は時と場所を殊にするにつれ、指稱する内容は、いろいろ變化するものであり、ゴレスは、琉球を意味してをる時もあるれば日本を意味する時もあり、日本と琉球を含めて意味してゐた時もある。従つてそのテキスト個々に即して解釋する必要があるが、一概にこれを琉球なり、又は日本なりと斷定することは贊成出来かねる。その語原も之を五島や方言ゴウロに比定するのは、まだ尙早ではあるまいか。矢張り高麗がもとで或場合日本と朝鮮も同一名稱の本に指稱されてゐたこともあつたのではあるまいか。過去に於てシラの名の本に日本と朝鮮が含まれて指稱されてゐたことも參考すべきである。此種の問題は氣永に廣く材料を集めて其上に議論を立つべきであり、本邦學者達が、何よりも先きにセオリーを立てて相争ふ傾向が見へるのは、協力を尊ぶ學界に於てあまり悦ぶべきことではないと考へられる。(松本信廣)